

一、ジョー 七歳 アメリカ・ワイオミング州 シャイアン族のインディアン保留地

「このガキ、何しやがるんだい」

その言葉とともに、ジョーの左頬に父親の鉄拳が飛んだ。その勢いで小さな体は粗末な木の床にしたたかに打ちつけられ、ジョーの頭は痛みと衝撃でぐらぐらした。

「やめとくれよ、あんた」

母親の涙声が、どこか遠くの方で聞こえるような気がする。

「てめえが俺に逆らうから、ガキまで逆らうようになるんじゃないか。酒を出せって言っ
てんだ」

「うちん中は、酒どころかなんにもありやしないんだよ。あんたがみんな飲んじまうから。
あつ、ぎゃああ」

父親は、自分の妻の髪の毛をひつつかんで振り回そうとした。ジョーは痛みをこらえて
再び父親の腰辺りに突っ込んだ。今度はひどく蹴りあげられて、ジョーは腹を押えてうず
くまった。母親が男の手を振り払って、ジョーの傍らにしゃがみこんだ。

「この子はまだ七つだよ。なんてひどいこと」

父親は、ふん、と向きを変えて妻と子に背を向けて腰かけると、コップを口に向けて逆
さにした。しかし、酒は一滴も口には入らず、男はそのコップを壁に投げつけた。壁でガ
ラスが勢いよく割れ、破片が飛び散る。それから逃れるように、母親はジョーを抱きかか
えて扉から飛び出した。

秋の夜の外気は、もうずいぶん冷たい。凍えるほどではないにしても、おなかと頭はジ
ンジンし、ひもじさまで加わって、心が冷え冷えしていた。無数の星だけが、透き通った
夜空に瞬いて、いくらか心を和ませてくれた。

保留地の中はどれも荒れていて貧しい。柱や屋根がゆがんだ家々や錆びついたトラック
がポツリポツリと並んでいる。誇り高き民族の伝統は、跡形もなく踏みじられてしまい、
誇り高いだけにそれを受け入れられない人々の心を、さらにみじめにおとしめていた。

「かあちゃん、どこに行くの」

「どこも行くところなんかありません。この辺、歩きまわるだけさ」

行くところのない親子は、ふらふらと草の茂る田舎道をゆつくりと、ただ無言で歩いた。右手に掘立小屋が見えて、母親が足を止めた。

「昔馴染みの占い師の家だよ。休むぐらいなら入れてくれるだろ」

軽い木の戸を押して中に入ると、小さな小屋には床もなかった。地べたに火をたいたあとがいくつもある。その灰の塊の一つを覗き込むように、老婆がしゃがみ込んでいた。二人の気配に気づいて顔をあげると、占い師はにやっと笑った。

「あんたかい。景気はどうだい」

「景気なんて言葉には、とうの昔から縁がないね。悪いけど、ちっと休ませてもらってもいいかい」

占い師は、自分の脇の、汚い布が敷かれた地面を指差した。

「そこに座んな。あんたの息子の運勢でも見てやるよ」

「今日は、手土産もないんだよ。いいのかい」

母親は疲れた体をどしんと床に落としながら、情けない声で言った。

「そんなことは見りゃあわかるさ。いいんだよ、サービスさ。坊や、こっち来て座んな」

ジョーは母親の顔をのぞいた。母親が占い師の方に顎をしゃくろのを見て、ジョーは灰の小山をはさんで老婆の前に膝を立てて座った。老婆は灰の中を、何やら色が塗られた棒でかき回して、穏やかな顔で頷いている。母親は独り言のように愚痴り始めた。

「父親は何かというところの子につらくあたるのさ。昔はあんな人じゃなかったのに。お役所が生活支援だなんて金をくれたのが、生活を良くするどころかめっちゃくちゃにしちまった。この子も不憫だよ。何か悪い精霊にでも見込まれちゃってんじゃないかって心配さ」

「大丈夫だよ。この子は希望だよ」

占い師の落ち着いた声に、母親は眉をしかめた。そんなわけはない、という顔だ。

「この子の魂は、希望の精霊だ。今にみんなを助ける力になる」

占い師は自信たっぷりにまだ灰の中を覗き込んでいるが、母親は疲れた上にあきれたという表情で何も言わない。そのうち、ジョーの手を取って立たせた。

「ありがとよ。でも、どこをひっくり返せば希望なんて出てくるんだか。まあ、今夜は納屋でも寝ることにするよ。邪魔したね」

立ち去ろうとする二人の後ろから、占い師がまだ話を続けていた。

「あなたの精霊は双子だよ。助け合う運命だ。あと十数年後に二人は出会う。そして、その時、精霊が目覚めるんだよ」

外の冷気は、また気持ちまで冷たくする。母親はジョーの体に腕を回して、抱きかかえるようにして歩いた。

「本当にあの女ももうろくしたもんさ。昔はあっちこっちの酋長が占いを頼みに来たもんだけど、いやはや、あんたを見てどこから希望なんて言葉が出るんだか」

「かあちゃん、僕、双子だったの」

母親は鼻を鳴らした。

「とんでもない。いるのは兄さんや姉さんだろ。それもどこにいるんだか」

「でも、よく夢に僕みたいなのがでてくる」

「あんたみたいなの？ なんだい、そりゃ」

「わかんない。でも、その子が僕を励ましてくれる。きっといいことがあるからって」

「だから、それを夢っていうんだよ。夢を見てる間だけは幸せさ」

家の近くまで来た二人は、家には入らず納屋に向かった。牛と鶏が一緒だが、藁の上は寒い外よりはずっと良かった。そこでとうとうとしたジョーは、また少年の夢を見る。

「諦めるなよ。きっと会えるから」

少年がにつこりしてそう言う。その後ろに、お城のような大きな建物が見えていた。

二、サーシャ 十歳 ロシア・モスクワ近郊 知能発達障害児の施設

寝床は硬くて冷たかった。おなががすいて眠れない。サーシャはかび臭い毛布を顔に引き寄せて寝返りを打ったが、体が痛いだけで苦しさは何も変わらなかった。

モスクワ郊外のこの施設に收容されて三年になる。乳児院の方が食べ物はまだ多かった。それに、保母たちももう少しは優しくかった。ここは地獄のようだ。

「サーシャ、起きてるかあ」

六つ並んで置かれている隣のベッドから、アンドレイが間延びした声でささやいた。

「おれ、腹が減って眠れねえ。何かないかあ」

アンドレイも空腹の苦しさが同じらしい。

「あるわけないだろ。眠れよ」

サーシャは疲れた声を出した。ほとんど毎晩のことだ。アンドレイが体を起こした。

「台所に一緒に行ってくれよお。残り物があるよお」

「よせ、見つかったら、またたかれる」

しかし、アンドレイはすでに破れたスリッパを履いて、サーシャの手を引いていた。

「なあ、腹減ってんだよお」

アンドレイは涙声だ。仕方なく、サーシャも身を起こした。

サーシャは足が悪い。乳児院に連れてこられたとき、右足の付け根が腫れていた。悪い菌が入ったらしい。多分、そのときにきちんと治療されていたら、彼の足は歩けないほど悪くはならなかったろう。しかし、誰もその治療費を払ってくれる者などいなかった。

彼の母親はアルコール中毒だった。貧しく何の楽しみもない人間が陥るお決まりのパターンだ。母親の状態を見て、産院の医師は、サーシャを知的発達障害ありと決め付けた。そのレットルが貼られれば、赤ん坊は施設に入れられる以外の人生を断たれる。完全に強力な国家を目指すこの国では、必要のない人間は社会から隔離されるのだ。

母親ははじめのうちは乳児院の息子に会いに顔を見せた。しかし、足の痛みのでいで泣いてばかりいる赤ん坊から、母親の足は遠のいていった。

歩行の手助けをしてくれる者が誰もいない乳児院で、それでも彼は痛い足を引きずりながら、何とか自力で移動する術を身につけた。そうしなければ、食べ物も数少ないおもちゃも、手に入らなかったからだ。

夜の施設は真っ暗だ。暗闇の中で、アンドレイに引きずられるように、サーシャも台所に入った。たまに、パンの切れ端が調理台の上に残っていることもある。しかし、その日、調理台は空っぽだった。

「棚には切つてあるパンがあるよ」

アンドレイは、もう後へは引けないという姿勢だ。サーシャは気が進まない。見つければ大ごとだ。そして案の定、アンドレイが棚からパンの包みをサーシャに渡したそのとき、懐中電灯がサーシャの顔を照らし出した。逃げ足の速いアンドレイの姿はもうない。サーシャだけが、パンを手にもって立っていた。

「アレキサンダー、これがどういうことか説明してくれるかしら」

保母の中でもこの人にだけは会いたくないと願っていたラリーサの、どすの効いた声が台所の戸口で響いた。この女は叱るときにはニクネームでなく、正式の名を呼ぶ。

「朝になったら、みんなの前でお仕置きをするから覚悟しておきなさい」

それは、もうそれだけで、十歳のサーシャを身動きできないほど震え上がらせるのに十分な言葉だった。

引きずられてベッドに戻ったものの、恐ろしくて眠れない。アンドレイは、毛布をかぶってこちらに振り向こうともしなかった。サーシャは、このまま消えてしまいたいとどれほど強く願ったことか。

しかし、朝はやってきた。ラリーサが注射器を持って部屋に入ってきた。他の子どもたちが驚愕の眼差しでささーっと部屋の隅にひいた。皆、この注射の恐ろしさを知っている。

「サーシャ」

世にも冷たい声で呼ばれて、サーシャは声も出ない。体中が震えて凍ってしまいそうな気がした。どうしていいかわからず、世界中をうらんだ。

ラリーサが脇に来ると、サーシャは叫び声を上げた。

「お願いです。もう絶対にしません。それだけは許してください。お願いです。お願いします」

しかし、ラリーサは無情に、サーシャの腕をむんずとつかむと、さっと針を突き刺した。ほんの一瞬で、サーシャの体に薬が流し込まれた。

「いいかい、みんな。悪いことをすれば自分が苦しい思いをするんだ。覚えておおき」

ラリーサはさつさと部屋を出て行った。皆が怖いものを見るように、サーシャの周りを取り囲んだ。小さいミーシャが部屋の隅からバケツを持ってきた。

すぐに嘔吐が始まった。胸をかきむしっても、どうにもならない。胃の中が沸騰しているように熱く、頭はがんがんとした。何もない胃袋から胃液が吐き出され、それでも胃袋は煮えくり返る。サーシャは小さなベッドの上でのた打ち回った。

食事の合図の鐘がなって、他の者は部屋を出て行った。アンドレイがばつの悪そうな顔で振り向いたが、すぐに背を向けた。

血が逆流するような苦しみの中で、誰かが背中をさすってくれていることに気がついた。時々顔を覗き込む。目と目の間が広くて平べったい感じの少女の顔。イーラだ。

イーラは話ができない。言葉を知らない。しかし、誰よりも優しい。ダウン症というのだと後で聞いたが、この少女だけが、一番辛い思いをしている子どもに、いつも寄り添ってくれるのだ。

そうして、夜までただ時が過ぎるのを必死に待った。少し苦しさが和らいできた。

「イーラ、僕はいつかここを抜け出すよ」

多分、その意味はわからないのだが、イーラは不器用な笑みを見せた。

「どこかで自分の生活がもてたら、君も連れ出しに来るよ」

目をつぶると、よく夢で見る少年の顔が見えた。年恰好が同じぐらいのみすばらしい姿の少年が、力強く頷く。

「大丈夫。必ずいいことがあるさ。負けちゃダメだ。二十歳の誕生日に、僕らはニューヨークで会うんだ」

サーシャは、ニューヨークなどという場所も知らない。しかし、この少年の夢を見るといつも落ち着く。そのまま、サーシャは深い眠りに落ちた。

三、ジョー 十五歳 ニューヨーク シヤイアン族宿泊施設

「今年のパウワウには戻っておいでよ」

母親のすがるような声が電話口から聞こえた。しかし、ジョーはそれには答えずに、「じやあな」とだけ言って公衆電話の受話器を戻した。

年に一度の部族最大のお祭りパウワウには、アメリカ中に散っている家族が集まってくる。しかし、シヤイアン族の昔ながらの儀式など、自分がインディアンとして生まれたという辛い事実を自分に突き付けるだけだ。

去年のパウワウも帰らなかった。生まれた町は貧しく仕事もない。男たちは、酒に浸って、すぐにケンカだ。無理をして帰る魅力など、どうひっくり返しても塵ほどもありはない。そう、だいたいグレイハウンドバスに乗るのにだって、金が足りない。

大人は暗い歴史を愚痴ることしかない。いきなりやってきて、彼らの生活を破壊した白人が全て悪いのだ。小さいときからいつもそう聞かされてきた。しかし、現実を打開する努力を本気でしている大人は、見たことがなかった。

十二で故郷を離れた。友達と二人で、そいつの兄さんが働いているニューヨークを目指したのだ。ニューヨークまでたどり着けば、人生がばら色に動き出すと信じていた。

初めに見つけた仕事は、中華料理屋の配達員だ。しかし、ある時配達途中にチンピラに絡まれて料理を台無しにしてしまった。店でも届け先でもなじられ、「やっぱりインディアンはダメだ」と言われた。そんなことが二回あって、中華料理屋を辞めた。

次の清掃員の仕事も、長くは続かなかった。自分にばかり一番汚い仕事が押し付けられ

ている気がしたのだ。気持ちがすさんで、ケンカもするようになった。ナイフをいつもポケットに忍ばせて、チンピラと付き合った。

自分でアパートを借りる金はなかったので、シャイアン族の同胞のための宿泊施設に世話になっていたが、誰も似たような状態だった。夢見て出てきた大都市には、彼らを受け入れてくれる隙間はなかった。

ある日、サンデイが宿舎に顔を見せた。地域のボランテニア団体が青少年の健全育成のためと称して、時々派遣するスタッフだ。二〇代半ばの赤毛の女で、アメリカ人らしい明るさは天性のものらしい。

パウワウで人が出払っている宿舎は閑散としていて、ジョーが一人で食堂のテレビを見ていた。

「ジョー、やっぱりパウワウに帰らなかったのね」

「大きなお世話だ。勝手だろ」

「もったいないじゃない。神様と話せるチャンスなんですよ。話してくればいいのに」

「神って誰さ。そんなものがあるなんて、あんただって思っただけでなくせに」

「あら、そんなことないわ。小さい宗派だけど、私は一応クリスチャンよ。地上の命は生まれる前みんな天使だったって、聞いたことない？ みんな必ずある役割を持って生まれてくるんですって」

「おれには、そんなもん、ねえよ。社会にとってまったく無用の存在さ」

「いいえ、誰にでも役割があるのよ。どんな小さな命にも。もちろんあなたにもね」

ジョーはフンと鼻を鳴らした。サンデイはため息をついたが、すぐに気を取り直すと隣の椅子に腰かけて、カラーのパンフレットをジョーに差し出した。

「この間話したコンピューターの学校。パソコンが使えれば仕事の可能性はずっと広がるわ。ねえ、今度の予算にあなたの費用を盛り込んでもらうから」

ジョーはその資料をちらりと見た。自分には縁のない、輝くような世界に思えた。眩しすぎる。

サンデイがその話を持ってきたとき、近くで聞いていた仲間がはやし立てた。そんなハイカラなこと、みんなに笑われるだけだ。ジョーはパンフレットを押し返した。

「どうして？ あなたぐらいの歳なら覚えるのは早いわ。絶対に面白いわよ」

「おれ、学校だってまともに行っていないんだぜ。それを、コンピューターなんて」

「大丈夫よ。学校に行ったかなんて関係ないわ」

「もう、いいよ」

ジョーはがたんと椅子の音をたてて立ち上がると、サンディを残して、そのまま表に出た。

ジョーの頭の中にあるのは、諦めだけだ。情けなかった。ありがたい話だってわかっていのに、素直にいい子の顔で教室に座っている自分の姿が想像できない。

もう日が傾いている。さびれた住宅地の中をぶらぶらした。一方で世界の目が集まる華やかなニューヨークの、ここは陰の部分だ。薄汚れた三階建てのアパートが並び、玄関に上がる石造りの階段に、たむろする男や女が座っている。

「よお、ジョーじゃねえか」

振り向くと、宿舎の仲間の友達で二、三度顔を見たことがある若い男だ。肌が浅黒くてベターっとしたしゃべり方をする。彼の周りで、だらっとした服の男たちが数人車座になっついていて、その輪の中から、細い煙が立ち上っていた。

「ちよつと、一緒にやってみないか」

やばい葉っぱだとすぐにわかった。後ずさりして、首をすばやく横に振った。

「そうか。お前。パソコン習うんだつてな。もう俺達、底辺のやつらとは付き合えねえよな。

まあ、ガキのうちはまだ夢見なきやな」

その意地悪な笑いを見て、ジョーはどうしてもよくなった。

「俺だつてやれるさ」

ひったくるように不細工な巻きたばこを受け取ると、やけっぱちで煙を吸い込んだ。ちよつとむせて、それから気づくと調子が違う。なんだか、頭がスコーンと抜けて、次々といろんなことを考えてしまうのだが、何を思っても愉快的気分になる。こりや、いい。

「パソコン習うよりさ、こいつを配る仕事をやんねえか。手っ取り早くて、すぐ金になるぜ」

ジョーはただにやにやしている。相手は、ジョーの手のひらにボールペンで番地を書いた。

「ここに明日の夕方五時に行くんだ。わかったな。誰かにしゃべるんじゃねえぞ」

男に肩を叩かれて、ジョーは気分のいいまま、ふらふらとその場を離れた。しばらく行つて公園のベンチに腰かけると、ふーっと眠くなった。

いつも夢で会う少年がまた現れた。

「明日、絶対に行ったらだめだぞ。それにハマったら抜け出せない泥沼だ」

「どうして、そんなに俺のこと心配してくれるんだ？」

「俺たちは双子の兄弟だ。お前だって、俺のことを何度も助けてくれたじゃないか」
ベンチで転がったま目が覚めた。宿舎に帰って、誰もいない食堂で残り物のパンを焼いて食べた。ベッドにもぐりこむと、閉じた瞼に大きな建物が見えた。周りは大きな公園らしい。宮殿のような建物の入口に人がいる。その場所も、人も、とても懐かしいのだ。これはどこだろう、と思いながら目が覚めた。

なぜだか、その建物は近くにあるような気がして、翌日、セントラルパークの周りを歩いた。五番街を、ジョギングする人や犬と散歩する人を眺めながら、ぶらぶらと北に向かううちに、左手の建物を見て愕然とした。

夢の中の建物と同じだった。

巨大な石造りの建物には、大きく垂れ幕がかかっていて、メトロポリタン美術館と書いてあった。名前ぐらいは知っていた。

石段に腰をかけると、背中に雄大な自然と歴史を背負っているような迫力を感じる。ここで誰かに会うような気がして、ジョーはその日一日そこで人を眺めながら過ごした。手のひらの番地は消えていて、そこに行くことも忘れていた。

四、サーシャ 十七歳 モスクワ近郊 同じ施設

ニーナは施設の建物の中で、前回の訪問の時に忘れた本を探していた。

アメリカの民間支援団体がモスクワに事務所を開いて施設にいる子どもたちへの支援活動を展開しているのを知って、ニーナはボランティアとしてそこに出入りするようになった。大学まで出たものの、仕事の口はあまりに乏しく、その落胆する気持ちを、福祉活動に参加することで少しでも埋め合わせたかった。

ソ連が崩壊するまで、社会の底辺にある孤児たちの様子を気に留める人などなかった。しかし、その劣悪な環境と子どもたちへの虐待の実態に、やっと一部の人が気づき始めたのだ。ニーナは月に二、三回、この施設に回ってきて子どもたちの話を聞いたり、職員の手伝いをしたりしていた。

ニーナの探していた本は、広間の隅に座る少年の手の中にあつた。それは新鮮な驚きだった。ここは知能の遅れた子どもたちの施設だから、本を読んでいる子どもを見かけるこ

となどこれまでになかったのだ。だから、本を開いてはいても、少年がそれを読んでいるとは初めは思わなかった。

「サーシャ、それ、面白い？」

ニーナは冗談めかして、少年に声をかけた。それは、魔法の世界を描いたファンタジー物語で、施設の子どもたちに話をしてやるのに役立つと思って用意していたものだ。

サーシャは目をキラキラさせて顔をあげると、夢中になってまくし立てた。

「うん、すごいよ。ねえ、ニーナ、こんな風に違う場所に飛んで行ったりなんて、できたらいいよね。でもさ、この魔法使いのやり方は間違ってると思うんだ。ここで、お城を破壊する必要はないと思わない？」

ニーナは面食らった。本はもう終わりかけている。

「この本を、はじめから読んだの？」

「うん。これは、ニーナの本？ もっと本を貸してよ。ここには本はあまりないから」

ニーナは目の奥が熱くなった。この子の知能は正常に違う。それなのに、本も与えられず、ほとんど建物を出ることすらなく、これまでの人生を過ごしてきたのだ。

「あなたは どうしてこの施設に入れられたのかしら？ ここには本を読む子はほとんどいないでしょ」

サーシャはうつむいた。

「僕はこじか知らないから、わかんないよ」

この子が正常な知能を持っていることは、教育を担当していた職員なら気づいたはずだ。よっぽどおざなりな教育をしていたか、気づいても放っておいたかのどちらかだ。

ニーナは話の出来そうな職員を探した。ラリーサは避けた。彼女に子どもたちへの愛情を感じたことは一度もない。マリーナがいた。先生役の職員だ。

そして、マリーナはサーシャの知能が普通であることを知っていた。

「でも、私に何ができています？ 他の施設に移すには大変な事務手続きが必要だし、そんな手間を一人の子どものためにしてくれる人はいないんですよ」

教師としての誇りはないの、という言葉が喉まで出かかったが、ニーナはそれを飲み込んだ。マリーナの反応は、それでもましな方なのだとわかっていた。そして、間違っただけで救われた少年を救う手だてがいかに難しいかということも……。ニーナは、怒りをどこにぶつけたらいいのかわからなかった。

「サーシャはもうじき大人の施設に移されます。もう十七ですから」

マリーナはそう付け足した。もう彼女の責任からは外れるのだ。

ニーナは支援団体の事務所に戻って、アメリカ人の所長に訴えた。

「その少年は、間もなく、知能が低いとみなされている人たちが一生を送る施設に移されます。菓子箱作りや旋盤作りなんて単純な仕事を毎日やらされるんですよ。そこに送られてしまったらもう手が届きません。彼をアメリカの教育施設に送ってやりたいんです」

所長は難しい顔で考え込んだ。

「進んだ教育を受けさせてやりたい子どもはほかにたくさんいるんだよ。知能障害児の施設からアメリカの教育施設に送るのは手続きが大変すぎる。優先順位からいって、それは非常に難しい」

「でも……」

ニーナは体中を震わせながら言葉を探した。しかし、そうなのだ。資金には限りがある。そして、救い出してやりたい子どもは山ほどいるのだ。肩を落として所長室を出たものの、サーシャがあのまま施設で一生を送るのかと思うといたたまれなくて、ナンバー2のナターシャの部屋をのぞいた。

牛乳びんの底のような眼鏡をしたナターシャは、いつも忙しそうだ。でも、頭の回転が早くて頼りになる。黙ってニーナの話聞いていたナターシャが問い返した。

「その子、体に悪いところはないの？」

ニーナははつとした。そうか。医療協力の手があった。

「サーシャは歩けないんです。小さい頃に手術を受けていけば歩けたんでしょうけど、今からだつて……。彼なら、一生懸命リハビリもするはずですよ」

ナターシャはうなずいてから、試すような目でニーナに言った。

「でも、ペーパーワークもたいへんよ」

「全部、私がきちんとやります」

ニーナは興奮して大きな声を出した。ナターシャがにつこりして頷いた。

「所長には、私からお願いしておくわ」

安価な労働力になるはずの少年を、すでに敷かれたレールから救い出すのは、この国では大変なことだった。あっちの役所、こっちの窓口、とたらいまわしにされながら、それでもニーナはへこたれなかった。

一方で、民主主義が入り込み始めた社会はさまざまな圧力を抱え込み、「人権」という欧米先進諸国が最も敏感に反応する分野での変革には追い風があった。さらに、社会にとつ

て好ましくない存在を排除しようとする以前からの傾向も利用できた。

なんと二年という時間はかかったものの、サーシャの出国許可を、ニーナはようやく手に入れた。

五、サーシャとジョー 十九歳 ニューヨーク

飛行機は雨の中、ニューヨークのケネディ空港に降り立った。雨の日は足が痛む。空港の係官が車いすを持ってきてくれて、サーシャはそれに乗って空港のゲートを出た。支援団体の人間が迎えに来てくれるはずだ。

「サーシャだね。ようこそニューヨークへ」

にこにこ茶色い髪の若い男が近づいてきた。周りでは、到着した人間と迎えの人間が抱き合ったり、歓声を上げたりしている。

まぶしい、とサーシャは思った。空港ロビーの物理的な明るさだけでなく、人々の表情も服装も明るく輝くようだ。生まれてから十九年間、自分には縁遠い明るさだった。

「高級ホテルとはいきませんが、ボランティアが宿泊場所を用意しています。明日からは早速病院の検査を受けられるよう手筈を整えていますよ」

若い男が、車いすを押しながら、明るい声で説明した。この一年、英語の勉強をしてきたので、ゆっくり話してくればだいたいの言葉は理解できる。しかしそれよりも、別世界のような国に今いること、こんなに親切にしてもらえていること、そんな今の自分の境遇の方が理解できないような気がした。

「僕は歩けるようになるんでしょうか」

サーシャはおどおどと尋ねた。

「なりますよ、きつと。明日会うのは、アメリカでも有名な外科医なんです。そんな人が、僕らの団体の活動にボランティアで協力してくれてるんですよ」

しかし、サーシャには自信がない。

小さい頃はまだ足を引きずって歩けたが、体が大きくなるにつれて、サーシャの右足は体を支えられなくなっていた。走ったことのない体を、もう自分はそういうものと思っていたから、歩ける自分が想像できない。体を切るのも怖いし、これで自分が生まれ変われるなどとはとても信じられないのだ。

しかし、車で空港から町に向かいながら、その別世界ぶりに驚愕し、人生が変わることが少しずつ実感されてきた。

「ほら、マンハッタンが見えてきましたよ」

言われて前方に目をやる。高層ビル群の巨大な風景が、まず尖塔の上の方から現れた。それが徐々に大きく目の前に広がってくる。おとぎの国のお城なんてもんじゃない。圧巻だ。サーシャは声も出ない。

そして、確信した。僕の人生は変わる。

一週間後、手術は無事に終わり、その後のリハビリも順調に進んだ。成長が進んでからの手術では完全には治らないかもしれないと言われた足は、むしろ医師自身が驚くほど見事に回復していった。

リハビリも卒業というころ、サンディという支援団体のスタッフが訪ねてくれた。その赤毛の明るい女性は、ニューヨークの観光案内の本を持っていた。

「世界のあこがれの街ニューヨークに来ているんだから、国に帰る前に絶対あちこち見ていかなくちや。私が案内するわ」

ニューヨークの名所の写真をめくるうち、サーシャはあるページの写真にくぎ付けになった。

「ああ、それはメトロポリタン美術館。セントラルパークの中にあるの。大きいわよ。とても一日で全部は見られないくらい」

サーシャはその建物を知っていた。なぜ知っているのか考えた。そうだ、夢の中だ。入り口前の石段で、会わなきゃならない人がいる。二十歳の誕生日に。

「僕、明後日、誕生日なんです」

「まあ、じゃあ、お祝いしなくちや」

「ここへ連れて行ってもらえませんか」

サーシャは今まで人に何かを頼んだことはなかった。遠慮がちながら真剣な表情のサーシャを見て、サンディはすぐに答えた。

「もちろんよ」

秋風が冷たいその日、二人は五番街の歩道を歩いた。サーシャはまだ杖が必要だったが、もう足の痛みはなく、自分で歩ける幸せをかみしめるには、願ってもない機会だった。

しかし、サーシャは緊張していた。あの建物は、物心ついて以来のみじめな十数年間、ずっと彼を支えてくれた夢の相手と会う、約束の場所なのだ。

サンディは縞のマフラーを、黙って歩くサーシャの首に巻いてやった。

「今日ね、私の友達も誕生日なの。だから彼も誘ったわ」

「そうですか」

サーシャは上の空だ。

「メトロポリタン美術館で何を見たいのかしら。前から行きたかったみたいね。絵が好きなの？」

サンディは何とか会話を盛り上げようと試みる。サーシャは少し躊躇してから答えた。

「会う人がいるんです」

サンディにとっては意外な答えだった。サーシャにニューヨークで知り合いがいるとは聞いていなかった。茶化して探りを入れてみたくなった。

「誰？ 女の人？」

「いえ」

「お友達なの？」

「実は、わからないんです」

「えっ」

「でも、ずっと昔から、そこで会うって約束していたんです」

煙に巻かれたような気分で、サンディは苦笑いした。美術館の建物が見えてきて、サンディは友人の姿を探した。

「いたいた。石段に座ってる」

その間に、二人は入口に続く石段の下まで来ていた。サーシャが石段を見上げて硬直した。眼から涙があふれた。

石段からジョーが立ち上がった。こちらも感極まった表情で、サーシャを見つめて固まっていた。

「なんだ、あなたたち、知り合いだったの」

サンディが二人の顔を交互に見て言ったが、その様子に当惑するばかりだ。

サーシャが杖を頼りにゆっくりと石段を上がった。ジョーは石段を下りて、途中の踊り場で二人は向き合った。

「会えたね」

「うん。本当に会えたんだね」

二人は手を出し合って固い握手をした。その瞬間に、二人の脳裏に小さい時からの辛い

思い出が次々と湧き上がってきた。しかし、不思議なことに、それらを思い出すこともう辛くはなかった。まるで二人の心の中に大きな浄化フィルターがついたかのようで、それらはむしろ未来への強い力に変えられていくようだった。目の前にあるものは、ただ明るい光に包まれているように思えた。

「僕はロシアに戻って、子どもたちの施設を改善する仕事をしようと思ってる」

「俺も生まれた土地に帰るよ。生活を良くする方法は絶対あるはずだ。家族や仲間のために一生懸命働くつもりだ」

「今までいつも励ましてくれてありがとう」

「こちらこそ。道を誤らなくてよかった。君のおかげさ」

二人は抱き合った。それから石段に座って、いつまでも話し込んでいた。

サンディは二人の姿に見とれた。そこだけ、太陽の光が明るくさしている気がする。

そして、天使の姿を見た気がした。羽根の生えた赤ん坊の姿の天使ではないのだが、そこにいる二人の姿が、天使の命を感じさせた。

さらに美術館の荘厳さが背後にあった。そこに包み込んでいる地上の時のうねりが一体となって二人を後押ししている、そんなことをサンディは感じていた。

* * *

その後、二人はそれぞれの土地に戻って働いている。

ジョーは、時々サンディと電話で話す。保留地に産業をおこして雇用を作り出すのだ、と彼は次々とプランをあげてみせた。壁は高いに決まっている、でも、負けない、と彼は決意を見せる。アル中対策も大きな課題だが、麻薬については、若者の中に広がることは絶対に防いでみせると息巻くのだった。

この支援団体のモスクワ支部で働くニーナからは、定期レポートにサーシャの近況が必ず盛り込まれている。彼は、孤児や遺棄児の収容施設において食事、教育などを改善する仕事に取り組んでいて、そのパワーにはみなが目を見張っているという。最初の仕事の一つとして、施設にいまだ保管されていたある薬品を完全に廃棄した。昔、政治犯に注射して拷問のために使われたという恐ろしい薬が、最近まで子どもへの罰として使われていたという報告がある。公になれば国際的な大非難を招いたことは間違いない。

ある時、ニーナからの手紙がレポートに添えられていた。

「サンディ、お元気ですか」

サーシャはもうほとんど普通に歩いています。仕事への意欲はとどまるどころを知りま

せん。

ところで、サーシャは、ニューヨークで双子の兄弟に会ってきたのだと言いました。人間としての兄弟ではなく、双子の天使なのだ。天使なんて表現が似つかわしくなくて笑ってしまいましたが、でも、どうも実際、その兄弟と頭の中でやり取りしているように思えることがあります。不思議ですね。

天使だとか、妖精だとか、魂だとか、実態も違いもよくわかりません。そんな呼び方は人間が勝手につけたものにすぎないですね。双子の天使だなんていうのも、人間にとつてのただのイメージでしょう。要は、人間の理解を超えた超自然の大きな力が、この地上に働いているということではないでしょうか。私たちにその不思議な力の源を見つけることはできません。

でも、サーシャが何か新しいことをしていく歩みの後に、子どもたちの笑顔が見えることは確かです。ジョーという人の仕事もきつとそうなのでしょう。私たちにも、その笑顔は見えます。私たちに理解し、知覚できることは、それだけでしょう。そして、私には、それで十分な気がします。

お元気でね。 ニーナ」

サンデイは手紙を閉じてつぶやいた。

そう、それで十分よ。

終わり